

日常の中の劇場一人を引き込む演劇空間―

1200087 谷口 綾

指導教員 渡辺 菊眞

高知工科大学 システム工学群 建築・都市デザイン専攻

1. 設計の背景

私は中学時代の文化祭をきっかけに演劇に興味を持ち、演劇をすることも観ることも好きになった。しかし、日本では海外のように劇場が身近ではなく、興味を示す人が多くはないように感じる。そんな中、どんな人にも気軽に演劇に興味を持ってほしいと考え、今回のテーマに辿り着いた。

私自身、演劇に興味を持つまで劇場に足を運ぶことは一切なかった。実際に足を運ぶ際も劇場は少しわかりにくい場所にあることが多く、日常から離れていることを実感した。そこで、劇場が日常に溶け込み、演劇に興味を持つ発信源になるような計画をしたいと考えた。演劇に携わってきた中で、演劇は演じることが全てではなく、裏方の仕事にも楽しさがあること、それが欠けると演劇が成り立たないことを感じ、それを伝えたいと思った為、“裏方が見える劇場空間”を設計するに至った。裏方が見えるようにすることで演劇を支えるものが示される。その結果、演劇への興味が湧くと考えた。

2. 設計の目的

人通りの多い賑わいのある場所に劇場を設けることで、人々の日常の中に劇場を溶け込ませる。

また、観劇を目的に劇場に足を運ぶのではなく、通りがかった時にふと目に入って思わず足を止めてしまうような空間作りを目指す。具体的には、演劇空間へのアプローチだけではなく、大通りに面した場所に裏方空間を配置することで、街において日常的に演劇製作の裏側を見ることができるようになる。

3. 既存の劇場における問題点

① 閑散とした場所にある

閑散とした場所に建っている劇場が多い。例として、大阪にあるオリックス劇場では休日であっても公演がなければ人通りが少ない。

(写真 1)



写真 1 オリックス劇場

② 閉鎖的な空間

劇場の多くが閉鎖的空間で中の様子を伺うことができない。

大阪のオフィス街にあるフェスティバルホールは、周囲の賑わいはあるが、前を通るだけでは中の様子はわからない。



写真 2 フェスティバルホール

以上の2点から、現在の劇場は、観劇をする為に足を運ぶ場所であり、目的がなければ劇場の存在自体知らないことが多いと言える

4. 対象敷地の選定

公共交通機関が近くにあるか、開けた場所であるか、賑わった場所であるかの3点に重点を置き、私が中学・高校時代を過ごした京都で対象敷地を選定した。

選定した敷地は京都府京都市東山区日吉町(図1の赤枠)。すぐ近くに京阪七条の駅やバス停があり、交通の便に優れている。また、学校や観光地が多い場所である為、学生や観光客で賑わっている。



図1 対象敷地

※国土地理院地図に方位記号を追記して掲載

5. 劇場のプランニング

劇場の部門としては、舞台・客席を中心に、ロビーやホワイエがある観客サービス部門、宣伝・広報部や

支配人室がある管理部門、演出家、制作マネージャーが居る制作事務部門、舞台装置や衣装を制作・保管する制作部門、楽屋、リハーサル室等、出演者を始めとする劇場関係者の控室がある上演部門がある。

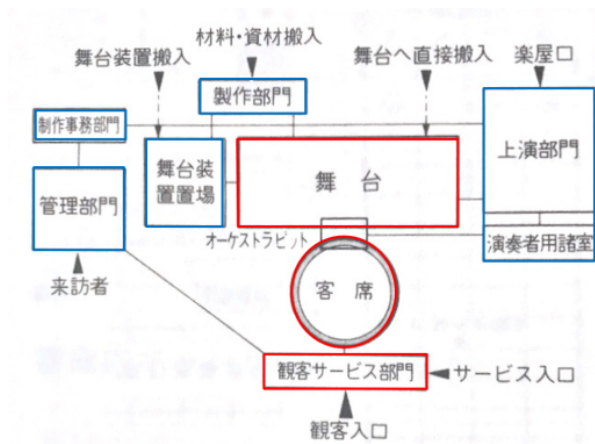


図2 劇場のプランニング

図2で示した赤枠が表の部門(公開部門)、青枠が裏方の部門(非公開部門)である。表の部門といっても、外部から様子が見えるわけではない。現在、劇場は表の部分が中から見る空間として存在しており、裏方部分は内包されて見えない状態で構成されている。

設計の目的から、各部門の役割、関係性を踏まえ、“裏方が見える劇場空間”をつくる。

6. 設計内容

6-1. 街の表裏を活かす

街の表側である大通りに面した部分に、劇場の裏側を配置することで、演劇の制作過程や搬入の様子を誰もが見ることができる空間をつくる。

6-2. 街の表から見える演劇の裏方

1階の大通りに面した箇所に搬入口、搬入通路、道具類の組み立て場所を設置。京都は学生の街といわれることから、搬入通路上部に演劇をする学生たちの交流の場となる、練習場を設け、そこで練習やワークショップに励む学生の姿が見ることができるようにした。

6-3. 内部空間の公開・非公開ゾーニング

設計した劇場は、表の公開部門(図3赤枠)、裏方の公開部門(図3緑枠)、裏方の非公開部門(図3青枠)に分かれる。

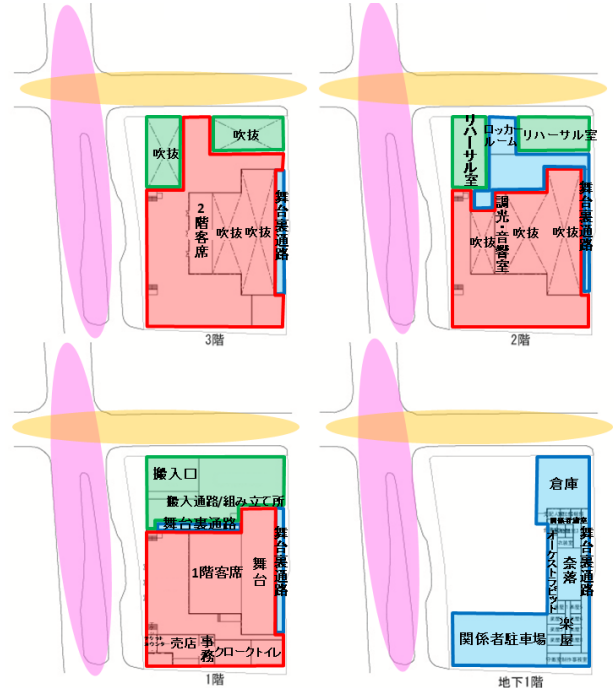
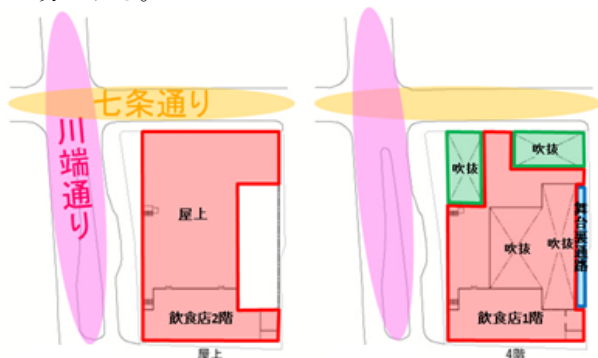


図3 劇場のゾーニング

6-4. 既存施設の組み込み

対象敷地に元々建っている飲食店を施設内に組み込んだ。

6-5. 万人に開かれた屋上空間

屋上の広場は誰もが入ることができ、場所を選ばずにできる演劇の練習をしたり、演劇をするかしないかに関わらず、様々な人との交流の場になる。

7. まとめ

既存の劇場では表の部分が中から見る空間として存在しており、裏方部分は内包されて見えない状況である。その隠された裏方部分の中でも演劇の魅力を引き出す箇所を外から見えるように大通りに面した位置に設置するよう計画した。これにより劇場の内部空間は、表の公開部門、裏の公開部門、うらの非公開部門の3部門に分類することができる。

また、対象敷地に元々建っている飲食店を組み込むことで、そこを目的地として来る人々が演劇空間に触れやすくなった。万人に開かれた屋上空間では、演劇をするしなに関わらず人々が交流することができ、そこから演劇に興味を持つ人が増えていくと考える。

8. 参考文献

- ・日本建築学会 編 (1994) コンパクト建築設計資料集成 丸善株式会社
- ・建築思潮研究所 編 (1997) [建築設計資料]63 演劇の劇場・プロセニウム形式とオープン形式の相剋・株式会社建築資料研究社
- ・※国土地理院地図に方位記号を追記して掲載
<https://maps.gsi.go.jp/#16/34.988834/135.767975/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c0j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1> (2020.01.20 取得)